

課題名 コンテナ苗木の生産技術向上に向けた取組

群馬県渋川森林事務所 星野 勝

1 課題を取り上げた背景

県内の林業用苗木生産の大部分が管内の苗木生産者により生産されています。この苗木生産については、生産の効率化及び造林作業の省力化等のため、コンテナ苗木の導入が進められていますが、コンテナ苗木の生産技術はまだ確立しておらず、コンテナ苗木の品質の向上、均質化、ロス率の低減、効率化等の余地があります。このことから良質なコンテナ苗木生産のため生産技術向上の普及が必要と考えるため、管内生産者に対して生産技術の向上に向けた普及の取組内容と結果と今後の課題等について報告します。



図1 コンテナ苗木根茎の生育不良（カラマツ）

2 具体的な取組

コンテナ苗木生産者の生産状況等の調査及び先進地域の視察について

取組の1つとして、まず管内のコンテナ苗木生産者の生産状況等について、県林業試験場の協力を得て、約20項目に亘って聴き取り調査を実施しました。次に、コンテナ苗木生産の先進地域である栃木県の生産状況を視察し、管内生産者の育苗方法との比較検討を行いました。



図2 栃木県A氏から選苗の説明を受ける参加者

3 取組の結果

今回、管内各生産者からコンテナ苗木の育苗方法について聴き取りを実施し、コンテナ苗木生産先進地域である栃木県との比較検討を行った結果、使用しているコンテナ容器や培土、施肥、殺虫剤、殺菌剤の散布等については、明確な違いは見られませんでした。一方、一番重要と思われる灌水方法で、灌水間隔、灌水時間等が各生産者によってまちまちであり、試行錯誤している実態が浮かび上がりました。

表-1は、栃木県A氏の育苗方法をまとめたものですが、立地条件や各施設の状況も異なるため、一概に栃木県の方法を採用できませんが、これらの方法を目安にして改善点が見いだせるよう普及指導していきたいと思います。なお、今回の視察研修に参加した管内生産者については、それぞれが改善及び工夫すべき点を見いだせたのではないかと考えられます。

4 まとめ

管内生産者からは、重労働なので今後は裸苗の生産からは撤退することを考えているとの声がありました。コンテナ苗木生産についても、機械の導入等により省力化を推進していく必要があります。苗木を効率的に生産できるコンテナ苗木は今後増加していくことが想定されますが、コンテナ苗木の生産については、健全で均質な苗木を安定して生産できるようになることが第一歩です。

今後は、造林事業者がどのような苗木を要望しているかなど、苗木生産者と造林事業者の意見交換ができる場が必要と考えます。さらに、次の段階として、造林現場のニーズに即した苗木（例；初期成長が早い、根茎が太い、大苗、早生樹、ネイチャーポジティブな地域由来の苗木など）を供給できるように基準等の検討を行うとともに、需要に即した苗木を生産できる体制を整備していく必要があると考えます。

表1 栃木県A氏の育苗方法のまとめ

栃木県 A氏の育苗方法のまとめ	
・コンテナ苗へ移植する時期：2月～	
・使用コンテナ容器：マルチキャビティコンテナ150cc、300cc	
・使用培土：コンテナ用育苗培土（栃木県産販売）	
・培土充填方法：手作業	
・培土の硬さの目安：手で押し固めた状態の硬さ	
・施肥：元肥、追肥とも実施	
・殺虫剤及び殺菌剤の使用：両方とも使用	
・灌水方法：半自動（リレーを回す）、位置は上部から、移植後から夏期は2日に1回・20分、秋期は4～5日に1回・20分、冬期は1週間～10日に1回・20分	
・根の形成状況の確認：育苗中、出荷時とも確認している	
・造林事業者からの感想：聞いている	
・所有機械：抜き取り機	
・工夫している点：蒔き付け床には必ず苦土石灰を撒いている	
移植前に選苗（小、中、大）、根が悪い苗は移植前に廃棄	
出荷率80%を目指している、ヒノキは灌水を控える	
殺菌剤に浸漬してコンテナ容器を洗浄	